

# 日本における『エミール』の初訳 菅學應の抄訳(1897年)を読む

La première traduction japonaise de l'*Emile* de Jean-Jacques Rousseau:  
lire la version établie par SUGA Gakuô (1897)

坂倉裕治  
SAKAKURA, Yûji

**【résumé】** On a déjà beaucoup étudié sur l'influence très diverse de Jean-Jacques Rousseau sur la modernisation du Japon. Mais il était généralement question des pensées politiques de NAKAE Chômin, surnommé le « Rousseau de l'Orient », ou des grands écrivains inspirés par les Confessions, et le côté pédagogique de son influence, me semble-t-il, n'a pas été autant éclairci jusqu'ici. Il s'agit dans cet article de lire philologiquement la première traduction japonaise (extraite) établie par SUGA Gakuô (1897), publiée avant la traduction intégrale d'après le texte français qui n'a eu lieu qu'en 1924. Quant au texte de Suga, on dirait qu'il s'agit d'une traduction libre, parce que l'on y trouve de nombreuses omissions et quelques ajouts qui n'existent pas dans le texte original. Suga a retraduit d'après la version anglaise d'Eleanor Worthington, dont la base de travail était les extraits comprenant « les principaux éléments pédagogiques des trois premiers livres » de l'*Emile*, choisis et annotés par Jules Steeg (1882). Suga n'a jamais consulté, me semble-t-il, la version française de Steeg, et il n'a traduit qu'un tiers du texte établi par Worthington. Par ces omissions doubles, le texte de Suga a déformé l'image du chef-œuvre de notre philosophe genevois, ce qui nous permet d'entrevoir ce que les Japonais de l'époque attendaient des « grands pédagogues occidentaux ».

キーワード      ルソー, 『エミール』, 受容, 翻訳, 菅學應

## はじめに

近代の黎明期の日本において、ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の著作を翻訳紹介した人物としては、『社会契約論』の前半を漢文（古典中国語）に訳した中江兆民（1847-1901）がとくに有名である。兆民の訳業の卓越性については、ほぼ同時期の他の2種類の翻訳と緻密な比較考量を行った井田進也氏の論がある<sup>1</sup>。

明治初期に高い水準でフランス語原典から翻訳されていた『社会契約論』に比して、『エミール』と『告白』の紹介は、英訳やドイツ語訳からの重訳、しかも、かなり問題のある抄訳の形ではじまった。『エミール』についていえば、英訳に依拠した全訳は1922（大正11）年の内山賢次（1889-1971）の訳業<sup>2</sup>を、フランス語原典からの全訳は1924（大正13）年の平林初之輔（1892-1931）と柳田泉（1894-1969）の翻訳<sup>3</sup>を待たねばならない。

日本における『エミール』の初期翻訳にかかわる文献学的研究は、きわめて乏しい<sup>4</sup>。本稿では、『エミール』の本邦初訳に関する情報を整理することを通じて、研究史上の欠落を埋めるための準備作業を試みる。

### 1. 菅學應訳とその典拠

定期刊行物に掲載されたごく短い部分的な翻訳<sup>5</sup>や紹介文の類<sup>6</sup>をのぞけば、日本における刊本としてまとまった『エミール』の翻訳紹介は、菅學應（1868-1932）が緑蔭の号を用いて出版した抄訳、佛國文豪ルツソオ元著『児童教育論』（東京、文遊堂、1897（明治30）年）をもって嚆矢とする。菅は伊予（愛媛県）出身、12歳で仏門に入り、紀州高野山で修行したのち、1889（明治22年）に慶應義塾に入塾した。1894（明治27）年12月に大学部文学科を卒業して、京都の仏教雑誌『六大新報』の主筆となり、布教に努めていたが、1896年12月、福沢諭吉を頼って上京。まずは慶應義塾大学の図書館運営にたずさわり、のちに普通部（中等教育を担う学校）と大学部の教員として作文指導などを担当し、『慶應義塾学報』（現『三田評論』）や『反省會雑誌』ならびにその後継誌である『中央公論』に、時には學應の署名で、時には緑蔭の署名で、寄稿している。福澤の『修業立志編』と『慶應義塾50年史』の編纂では中心的な役割を担った<sup>7</sup>。論考のなかで自ら訳した『エミール』を引用している例もみられるとはいえず<sup>8</sup>、残された菅の文章に『エミール』に対する特段の関心をうかがうことはできない。筆者の調査で得られた限定的な伝記情報からも、どのような経緯で菅が『エミール』の翻訳を企てたのかを知る手がかりは見いだせていない。

菅は凡例で翻訳の底本を明示している。全五編からなる『エミール』の第三編までの部分から抜粋した文章を集めたスティーグ（Jules Steeg, 1836-98）の普及本<sup>9</sup>をウォージントン（Eleanor Worthington）が英訳したもの<sup>10</sup>に基づいて重訳したと凡例に記されている。1902年には、『父母と子供』（文光堂）という題目で新版が出ている。訳出箇所はごくわずかな例外をのぞいてほぼ同じであるが、新版のほうが若干訳文がこなれている<sup>11</sup>。

菅が『エミール』という原題を残さなかったのは、当時の日本の読者にとって、フランスの人名はなじみが薄いと考えたからであろう。菅は凡例でわざわざ、エミールは子どもの名前であると説明している（『児童教育論』5頁：『父母と子供』23頁）。本文でも、底本で「エミール」とあるのを菅は単に「子供」と訳している箇所がある（Worthington, p.41 : Steeg, p.36 : OC, t.IV,

p.300<sup>12</sup>:『児童教育論』31頁:『父母と子供』33頁; Worthington, p.156-157; Steeg, p.138-140: OC, t.IV, p.487-488:『児童教育論』149頁:『父母と子供』155-157頁)。

しかし、菅は底本を忠実に訳出しているわけではない。「文字章句の間に拘泥せず」に、「元著者の主義精神を邦人に傳ふる」ことを主眼とした(『児童教育論』5頁)という菅の訳には、省略や敷衍が頻繁にみられ、全体としては自由訳とみなしてさしつかえないものとなっている。

そもそもスティーグの普及本は、全五編からなる原著のはじめの三編から適宜文章を抜粋して、数ページごとに見出しを立てて一括りにまとめたものである。見出しで括られたまとまりを、本稿では便宜的に「項目」と呼ぶことにする。第三編までに限定した理由として、編者の序文では、『エミール』第四、第五編の内容が教育学(pedagogy/pédagogie)の範疇に入らない(Worthington, pp.7-8; Steeg, p.10)と述べられていることから、この版本は主として初等・中等教育にたざさわる教師や教職をめざす学生を想定読者としていたと推測される。採られた段落内でも省略があるほか、段落や文章の入れ換えなどの「編集」も認められることに、留意が必要である。

ウォージントンの英訳では、スティーグのフランス語普及版とは、段落の分け方が異なっている箇所があるが、菅の翻訳は英訳に準拠している(cf. Worthington, p.95-96; Steeg, p.86:『児童教育論』73-75頁:『父母と子供』77-79頁)。凡例に記載されているとおり、菅がウォージントンの英訳本を底本としたことはまず間違いないであろう。

なお、筆者が検討した限りでは、スティーグのフランス語版、『エミール』の他の版本、訳本を菅が参照した形跡は認められなかった。したがって、菅訳を読み解く際には、ウォージントンの英訳本(典拠)との異同を確認する作業が必須となり、スティーグの普及版、現代の批判版などは補助的な資料という位置づけとなる。

## 2. 菅緑蔭訳の特徴

### (1) 項目の省略

スティーグが選んだ40あまりの項目のうち、13項目を菅はまったく訳出していない。省略された多くの項目で、抽象度の高い哲学的な議論が展開されている。菅が訳出しなかった項目をいくつか見てみることにしよう。

「自然から離れないための格率(Maxims to Keep us True to Nature / maximes pour ne pas s'éloigner de la nature)」という見出しをつけられた項目(Worthington, pp.30-35; Steeg, pp.27-32; OC, t.IV, pp.288-292)では、道徳性の基礎となる理性の役割、理性が発達する以前の自己保存と欲求について、哲学的な議論が展開され、子どもに可能な限りの自由を与える教育の三つの格率が提示されている。第一編の教育の原理原則を述べた部分だけに、この種の省略は、今日の読者の目には奇妙に見えるかもしれない。

子どもを本来の場所にとどめるための最良の手段だとルソーがいう「よく規制された自由(Well-Regulated Liberty / La liberté bien réglée)」(Worthington, pp.54-57; Steeg, pp.48-50; OC, t.IV, pp.320-322)と、続く「ゆっくり進む(Proceed Slowly / Procéder avec lenteur)」という「教育の最も偉大で、最も重要で、最も有益な規則(la plus grande, la plus importante, la plus utile règle de toute l'éducation)」, すなわち「消極的教育(éducation négative)」の原則にふれた項目(Worthington, pp.57-62; Steeg, pp.50-56; OC, t.IV, pp.323-329), さらに「所有権の観念(The

Idea of Property / L'idée de la propriété)」という見出しをつけられた「そら豆の挿話」(Worthington, pp.63-67 : Steeg, pp.56-60 : OC, t.IV, pp.329-334) と、底本では続いた三つの項目、今日の読者には馴染みの深い部分を、菅は訳出していない。

子どもの嘘について述べた項目 (Worthington, pp.68-74 : Steeg, pp.60-66 : OC, t.IV, pp.334-341) は、ほとんど省略なく訳出している (『児童教育論』51-62 頁, 『父母と子供』53-65 頁) のに對して、「消極的教育 (Negative or Temporizing Education / L'éducation négative)」と題された、子どもを年齢相応に扱うという教育の原理原則を述べた項目 (Worthington, pp.75-77 : Steeg, pp.66-68 : OC, t.IV, pp.341-343) は、続く「記憶力について (Concerning the Memory / De la mémoire)」と題された子どもに可能な知的能力について論じた項目 (Worthington, pp.77-80 : Steeg, pp.68-71 : OC, t.IV, pp.343-346), 「言葉の学習 (On the Study of Words / De l'étude des mots)」と題された教師の見栄のために外国語、とりわけ死語 (古典ギリシア語やラテン語) を子どもに教えることを戒めた部分 (Worthington, pp.80-86 : Steeg, pp.71-77 : OC, t.IV, pp.346-358), 「説教なしに教育すること (Gouverner sans préceptes)」と題された、「生徒には自分が主人であると思わせておいて」じつは教師がすべてを管理し、子どもの知らない間にその意志さえも統御する「自由の外観を残した隷属状態」に置く必要があると説いた項目 (Worthington, pp.86-91 : Steeg, pp.77-81 : OC, t.IV, pp.359-364) とともに、まったく訳されていない。なお、菅訳の検討には影響しない瑣末なことであるが、英訳者は「説教なしに教育すること」という小見出しを立てていないために、先行する項目とひとまとまりになってしまっている。

『エミール』には、ルソーが提案する教育の外である程度育った子どもを一時的に預かったばあいに、何が起こるのかを論じた、実例的挿話がふんだんに盛り込まれている。菅は、アヒルの奇術師の挿話 (Worthington, pp.143-147 : Steeg, pp.118-123 : OC, t.IV, pp.437-441), モンモランシの森の中で迷子になった子ども (『通俗的エミール』) の挿話 (Worthington, pp.133-138 : Steeg, pp.128-131 : OC, t.IV, pp.447-450) を省略している。

## (2) 部分的省略

訳者による意図的な「加工」のあり方がさらにはっきりと現れるのが、部分的に省略したり、底本とは文意の異なる訳が与えられている箇所である。それらの中から、特徴的だと思われる箇所を整理して提示することにしよう。

### (A) 自然

ルソーは、自然に従うことを求める。「自然」の概念については、ルソー研究史上、さまざまな議論の蓄積があり、解釈上の困難が再三指摘されている。菅にとっても理解が難しかったようである。

ルソーによれば、教育は自然、事物、人間の三者から来るとされ、最も人間が手を加えることのできない自然に、一部分しか手を加えられない事物と、より多くの手を加える余地のある人間の教育を合致させる必要がある。そこから、「自然」概念について抽象度のやや高い議論が続くことになる。しかし、菅はこうした議論にかかわる3段落をすべて省いて、「自然及び境遇よりして来る所のものは暫く惜き、先づ教師が授くる教育に就いて一言せん」(『児童教育論』3 頁) としている。原著では、人為的教育が自然に従うべきであることを論じているのであるが、菅の議論

は、特定の職業向けの教育ではなく、「一人前の人間」になるための普通教育を盛んにすることが必要だという議論にすり替わってしまっている。

父母の義務を論じる際にも、自然をよく観察し、自然に従う (« *Observez la nature, et suivez la route qu'elle vous trace* ») (Worthington, p.19 : Steeg, p.18 : OC, t.IV, p.259) が求められているが、菅は「自然」にかかわる哲学的議論をすっぱりと訳し落としている。

#### (B) 発達段階の区分

スティーグは、各編のそれぞれの冒頭に概要を示している。菅は編の区別とともに、この概要を訳出していない。『エミール』では、子どもの発達段階に応じて必要となる教育が質的に異なるとされ、また、それぞれの発達段階をそれにふさわしく充実させることが、つぎの段階への最善の準備になると論じられている。それゆえ、編の区別を省略したことは、著作の構造の理解にかかわる重要な変更であるといえよう。

ルソーが提示する発達段階の違いに菅があまり関心を寄せなかったことは、随所からうかがい知ることができる。

たとえば、第二編の冒頭部分のテキストに、スティーグは「ゆきすぎた用心を差し控えること (Avoid taking too many Precautions / se garder des précautions excessives)」という見出しをつけている。子ども時代の区分を述べた第一段落を含む、段落三つを菅は省略している (『児童教育論』30頁、『父母と子供』32頁)。同様に、この項目の最終段落、子ども時代の第二期の特徴を述べた段落も省略されている。スティーグが第二編の成果をまとめた部分 (Worthington, pp.113-119 : Steeg, pp.102-107 : OC, t.IV, pp.417-424) もまったく訳出されていない。しかし、第三編のまとめの部分 (Worthington, pp.155-157 : Steeg, pp.138-140 : OC, t.IV, pp.486-488)、すなわち子どもとしての完成のありようを記述した部分は訳出されており、発達段階をふまえて漸進的に手法を変えていくという原テキストの構造はほぼ完全に消去されている。

#### (C) 社会関係

生徒はその発達に応じて、外界の事物、他人と関係を取り結んでいく。その関係のあり方を適切に統御することが、ルソーが提案する教育の大切な役割のひとつとなっている。しかし、菅の訳では、人間と人間が取り結ぶ「道徳的關係」にかかわる危険性、すなわち、支配＝被支配関係、従属関係についてのルソーの議論の多くが訳し落とされている。

たとえば、距離の感覚を獲得する以前に、子どもが遠くにあるものに手を延ばすことについて、ルソーはつぎのように述べているが、これを菅は訳し落としている (『児童教育論』19頁、『父母と子供』20頁)。「感覚器官によって欺かれることがなくなるやいなや、子供の努力の理由が変化する。この変化は重要で、説明が必要である (Sitôt qu'il n'est plus abusé par le sens, son effort change de cause : ce changement est remarquable, et demande explication)」 (Worthington, p.27 : Steeg, p.25 : OC, t.IV, p.285)。ここでルソーは、事物を手に入れたいという子どもの欲求 (besoins) が、大人に命令・支配したいという欲望 (désirs) に変わらないように注意を促しているのである。ここでは詳しく論じる紙幅はないが、この文脈でルソーが「欲求」と呼んでいるものには生理的身体的な根拠があって、生存と幸福に直接的にかかわるものであるのに対して、「欲望」と呼んでいるものは、特定の文化的背景をもった社会の中で生じてくるもので、必ずしも

生理的身体的な幸福にかかわるものではない、ということに留意しておこう。直後に、「欲求を満たすために他人の助けが必要なばあい、欲求が満たされないことが、記号によって表現される (*Le malaise des besoins s'exprime par des signes quand le secours d'autrui est nécessaire pour y parvenir*)」とはじまる段落があり、続く段落とともに、音声言語、身振り言語と欲求の関係について論じているが、これも菅は訳出していない。この部分に続く、泣き声をあげる子どもをおだてすかせる世間のやり方を批判して、むしろ大きな声で泣いているあいだは放置するべきだとするルソーの提案の部分だけが訳出されている。この前後にはスティーグのテキストにもかなりの省略が認められ、編集されたテキストから原著者の意図をうかがい知ることが容易ではない。とはいえ、スティーグが残していたつぎの一文を、菅が訳し落としているのは注目に値すると考える。「こうした涙から、一般には十分な注意が払われてはいないけれども、人間と彼をとりまくあらゆるものとの最初の関係が生じるのである。社会秩序の長い鎖の最初の環が、こうしてつくられるのである (*De ces pleurs, qu'on croirait si peu dignes d'attention, naît le premier rapport de l'homme à tout ce qui l'environne : ici se forge le premier anneau de cette longue chaîne dont l'ordre social est formé*)」(OC, t.IV, p.285 : Steeg, p.25 : Worthington, p.27)。

スティーグが「子供を愛すること (*Childhood is to be Loved / Aimer l'enfance*)」という見出しをつけている項目 (Worthington, pp.42-44 : Steeg, pp.37-39 : OC, t.IV, pp.301-303 : 『児童教育論』 35-40 頁 : 『父母と子供』 37-42 頁) では、底本の文章の前に、四季の移ろいと人生を重ねながら子ども時代に覚える愛着を情緒的に語った3頁ほどの文章をつけ足し、さらに段落を入れ換えて訳出するなど、かなり手が加えられている。その一方で、「事物の秩序 (*l'ordre des choses*)」のなかに子ども時代をしかるべく位置づけることを求めた、この部分の最終段落は訳出されていない。続く「奴隷でも暴君でもなく (*Neither Slaves nor Tyrants / Ni esclaves, ni despotes*)」と題された項目でも、自由、自分の位置にとどまること、子どもをただ事物にのみ依存させることが自然に従うことでもあること、子どもが大人に命令してはならないこと、を論じた冒頭の6段落 (Worthington, pp.44-47 : Steeg, pp.40-42 : OC, t.IV, pp.309-313) を菅は省いて、甘やかせずすぎるのは好ましくないという教訓だけを残している (『児童教育論』 41 頁 : 『父母と子供』 43 頁)。

スティーグが「身体の教育 (*Physical Training / Éducation des corps*)」という見出しをつけた部分では、自分とのかかわりで身の周りにあるものを調べてみようという関心を子どもはもつものだとする指摘に続いて、子どもの理性、すなわち「感覚的理性」について述べられている。その冒頭段落 (Worthington, p.91 : Steeg, p.82 : OC, t.IV, pp.369-370) が菅の訳では省略されている。その代わりに、項目としては省略していた部分のなかから、「体育」にかかわる記述を接ぎ木し、子どもの遊戯の有益性について強調するテキストとして編集し直されている (『児童教育論』 63-68 頁 : 『父母と子供』 66-71 頁)。なお、この項目の見出しについては、英訳とフランス語原文とはずれており、英訳のほうがより、具体的な教育活動に寄り添うニュアンスを含んでいることにも、留意しておきたい。

菅の訳では、哲学的な、抽象度の高い議論が省略される傾向が顕著である。しかし、比較的抽象度の高い議論であっても、底本にほぼ忠実に訳出されている議論もある。「五官の修養 (*Exercice of the Senses / Exercices des sens*)」と題された部分 (Worthington, pp.96-97 : Steeg, pp.86-87 : OC, t.IV, pp.380-381 : 『児童教育論』 76-79 頁 : 『父母と子供』 80-83 頁)、続く触覚、視覚、聴覚、味覚に関する部分である (視覚と関連する「幾何学」に関する部分は省略されている)。なお、こ

の件に関するスティーグの編集方針は一貫しておらず、嗅覚に関するテキストは収めていない。感覚論哲学にかかわる議論が、具体的な教育方法の基礎となっているということも、菅が訳出した理由であるかもしれない。菅の訳に続いて現れた2点の日本語抄訳が、それらの典拠であるペイン英訳にならって関連する記述の大部分を省略していることと合わせて考えると、当該箇所を菅が訳出していることは注目に値すると思われる。この点になんらかの意味があるのかどうかを明らかにするための資料を発掘することは、今後の課題である。

## おわりに

近代の黎明期の日本において、ルソーは、『社会契約論』、『エミール』、『告白』と、それぞれ想定される読者を異にする作品の翻訳を通じて紹介された。『社会契約論』の訳者たちには、西洋列強による支配に屈しない、近代国家を建設するための手がかりを探ろうという意図がみえ、『告白』の訳者たちには、近代的自我のめばえを表現する術を探ろうという意図がみえる。それぞれに切実な課題意識をもって訳出されたこれら2点の著作に比べると、初期の『エミール』の翻訳には、訳者の主体的な課題意識が必ずしも明確な形でみてとることはできないように思われる。

教員養成にかかわる人々のあいだで、西洋の教育思想史、教育史の概説書に必ず登場する『エミール』が日本語に訳されることに相応の期待があったことは間違いないであろう。明治期にまずは翻訳紹介の形で流通しはじめるこれらの概説書と、ほとんど自由訳といってよい初期翻訳によって紹介された『エミール』は、その後長らく教育関係者たちによる『エミール』理解を、ある意味で助け、ある意味で妨げ、全体としては、ゆがんだ虚像をねりあげていくことに手を貸すことになる。ルソーの教育論を成り立たせている枠組み<sup>13</sup>をほとんど見てとれないほどに省き、前提となる哲学的理論的記述の多くを割愛して具体的な教育の手順に焦点を当てた菅の翻訳は、その出発点に位置づくテキストのひとつであった。

\*本稿は、2011年度立教大学学術推進特別重点資金の交付を受けた研究「アジアの近代化とルソーの受容：近代日本におけるルソーの教育思想の受容を読み直す」による成果の一部である。本研究をすすめるにあたり、タンギー・ラミノ氏（フランス国立学術研究センター上席研究員）の呼びかけで発足した国際的研究グループ「アジアにおけるルソー」の参加者との議論から有益な示唆を受けた。関係各位に謝意を表明したい。

## 註

- 1 Ida Shin'ya, « Examen comparatif des trois traductions du *Contrat social* au début du Japon moderne », Robert Thiéry (éd.), *Jean-Jacques Rousseau, politique et nation*, actes du II<sup>e</sup> Colloque international de Montmorency (27 septembre-4 octobre 1995), Paris, H. Champion / Montmorency, Musée J.-J. Rousseau, 2001, pp.1003-1008. 井田進也「明治初期『民約論』諸訳の比較検討」井田編『兆民をひらく——明治近代の「夢」を求めて』光芒社, 2001年, 116-156頁。
- 2 『エミール教育論』内山賢次訳, 洛陽堂, 1922年。『エミール(全訳)』内山賢次訳, アルス, 1925年。
- 3 『エミール』平林初之輔, 柳田泉訳, 春秋社(世界家庭文学名著選)全2冊, 1924年。改訳されて, 春秋社(世界大思想全集10, 1927年)より平林初之輔の単独訳として刊行され, さらに改訳されて岩波

文庫（全5冊、1951年）に収められた。

- 4 さしあたり、以下を参照。原聡介「戦前のわが国におけるルソー教育思想のとらえ方」『教育学研究』45-4、1978年。拙稿「日本の近代化と『エミール』——三浦蘭造の抄訳を中心に——」『思想』No.1027、岩波書店、2009年11月、194-207頁。
- 5 雑誌に掲載された『エミール』の部分訳としてはつきがある。「ルソー氏『エミール』一名教育論」小野清照訳、『教育新誌』第39号、1879年1月。「同（第三十九號ノ續）」、同誌第42号、1879年2月。この訳業は、第一編冒頭の11段落（OC, t.IV, pp.245-248）をほぼ逐語訳したものとなっている（ただし、第2段落と第3段落の間の段落分けがなされていない）。小野（生没年不詳）は、貌魯格（モーリス・ブロック）著『統計論』全4巻（金剛閣、1883-1887年）、フランス語の初学者向けの学習書『仏蘭西学独案内』（西宮松之助、1884年）、さらに『巴理萬國大博覽會日本出品品評抄譯』（農商務省庶務局、1884年）など役所関係の文書、法令などをフランス語から訳している。『エミール』についてもフランス語原文から直接訳出したものと推察されるが、訳者が典拠についてなにも記しておらず、訳出箇所もごくわずかであることもあって、翻訳の底本を特定する決定的な根拠を見いだすにはいたっていない。小野訳の冒頭には、本文に先立ってごく短い訳者の添え書きが掲載されており、それによれば、「余曾テルソー氏ノ著セル『エミール』ト題セシ教育論ヲ讀ミ大ニ感ズル所アリ因リテ漸次ニコレヲ譯出シ以テ貴社ニ寄セントス」として、原稿を編集部に郵送したということである。『教育新誌』（汎愛社刊）は、緒方洪庵の適々齋塾、幕府の西洋医学所、洋書調所・医学所に学んだうえに開成所でフランス語を修め、1872年より文部省に勤務して、明治政府の学制制定に貢献したとされるフランスの教育関係法規集『仏國學制』（全10巻、文部省、1873～76年）をはじめ、『仏國學帝政史』（宮内省、刊行年不詳）の翻訳、フランスの小学校で用いられた教科書（J. Garrigues, *Simplex lectures sur les sciences, les arts et l'industrie, à l'usage des écoles primaires*, Paris: L. Hachette, 1858）を翻訳した『牙兵初學須知』（田中耕三訳、文部省、全11巻15冊1875-76年）の校閲など、フランス（語）とかわりの深い仕事がある佐澤太郎（1838-96）が、辻新次（1842-1915）、鈴木唯一（1845-1909）らとともに、1877年に創刊して、自ら編輯長を務めた雑誌である（海後宗臣「福山藩の仏蘭西学者佐沢太郎先生と『仏國學制』」、『福山学生会雑誌』第66号、1928年、参照）。辻は、開成所および大学南校で仏蘭西学の教官、大学南校校長を経て1871年より文部省に勤務し、明六社会員、大日本教育会（のちに帝國教育会）、仏学会、伊学協会の各会長にも就任した（中野実「解説」、安倍季雄（編）『男爵辻新次翁』大空社（『伝記叢書』20）、1987年、1-16頁、参照）。鈴木は、開成学校教授、東京府会議員、文部省奏任御用掛を歴任し、モンテスキュー（Charles Louis de Secondat, baron de la Brède et de Montesquieu, 1689-1755）の『法の精神』（『律例精義』、瑞穂屋卯三郎、1875）、ダランベール（Jean le Rond d'Alembert, 1717-83）の『法の精神』概要』ならびに『モンテスキュー賛辞』（『律例精義大意』、瑞穂屋卯三郎、1875）をフランス語から翻訳している（馬場慎「鈴木唯一と律例精義」『法政論叢』第23巻、日本法政学会、1987年、58-76頁、参照）。
- 6 『エミール』に関する明治初期の紹介記事としては、以下がある。私人的利氏著「母親ノ心得——小兒ヲ待遇スル注意」淺岡一訳、『教育雑誌』第80号、文部省印行、1878（明治11）年10月、28-42頁。山県悌三郎「盧騷氏をみる論」『大日本教育会雑誌』71、1888年1月、34-41頁。「同（2）」72、1888年2月、114-120頁。「同（3）」73、1888年3月、184-189頁。「同（4）」75、1888年5月、324-331頁。「同（5）」78、1888年8月、612-617頁（この論は以下に再録されている。山県悌三郎「盧騷氏をみる論」『學海之指針』第15號、1888（明治21）年9月、8-15頁。「同 第二」同誌第16號、1888年10月、17-40頁）。これらの紹介記事については、後日を期して稿を改めて論じたい。
- 7 三田商業研究會編纂『慶應義塾出身名流列傳』實業之世界社、1909年、933-934頁。「菅學應氏の計」『三田評論』第422号、慶應義塾、1932年10月、19頁。慶應義塾編『福澤諭吉全集』第18巻、岩波書店、1962年、678、764-765、822頁。慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』第8巻、岩波書店、2002年、81、258、367頁。福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典〔慶應義塾150年史資料集別巻2〕』慶應義塾、2010年、514-515頁（菅の肖像写真を掲載）。『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター、1972年、41、46-47、51頁。『慶應義塾百年史』慶應義塾、1960年、中巻（前）336、574、582-583、668頁、中巻（後）129頁。なお、国立国会図書館と慶應義塾に所蔵されている菅の著作に、『エミール』の翻訳以外につきがある。『弘法大師と日本文明』伝燈会、1895年。『十住心の一枝』伝燈会、1896年。『成功要録』東京、博文館、1899年。『立志の師表成功の模範カーネギー』東京、博文館、1901年。『言行要録』博文館、1902年。『作文活法』東京、金港堂、1906年。



- 8 菅學應「教場をして第二の家庭たらしめよ」『慶應義塾學報』第17号、1899年7月、19-20頁。
- 9 Jean-Jacques Rousseau, *Emile, ou de l'éducation : extraits comprenant les principaux éléments pédagogiques des trois premiers livres, avec une introduction et des notes par Jules Steeg*, Paris, Hachette, 1882. 編者のステীগは、ストラスブールで神学を修め、牧師となったのち、新聞社勤務を経て、政治家に転向、ジロンド県選出下院議員 (Député de la Gironde)、総視学官を歴任した。ガルニエ古典叢書の『エミール』 (*Emile ou de l'éducation*, Paris, Garnier, 1872)、教師向けに編集された『エミール』第二編のみの版本 (*Emile ou de l'éducation*, livre II, publié avec une notice, une analyse et des notes par Jules Steeg, Paris, Hachette, 1888) を校訂している。また、1889年2月3日、「偉人」を祀るバリの霊廟パンテオンにて、ルソーの記念碑の除幕式の席で演説している (cf. John Grand-Carteret, J.J. Rousseau, jugé par les Français d'aujourd'hui, Paris, Didier, 1890, pp.546-550)。ビュイッソン (Ferdinand Buisson, 1841-1932) が編纂した浩瀚な教育学事典 (*Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, Paris, Hachette, 1911) では項目「ルソー」を執筆している。なお、内務大臣、国民教育大臣などを歴任した息子のテオドル・ジュール＝ジョゼフ (Théodore Jules-Joseph Steeg, 1868-1950) と混同した記述も散見されるので、注意が必要である。
- 10 Jean Jacques Rousseau, *Emile, or concerning education : extracts containing the principal elements of pedagogy found in the first three books, with an introduction and notes by Jules Steeg*, translated by Eleanor Worthington, Boston : D.C. Heath, 1889. 筆者が調査した限りでは、ウォージントンの伝記情報やその他の出版物は発見できなかった。『エミール』の訳書の扉には、著者の肩書として「元イリノイ州クック・カレッジ師範学校 (Formerly of the Cook co. Normal School, Ill.)」と記載されている。
- 11 とくに大きな異同はつぎの一箇所である。底本にあった「植物は栽培によって手を加えられ、人間は教育によって手を加えられる (On façonne les plantes par la culture, et les hommes par l'éducation)」 (Worthington, p.12 : Steeg, p.12 : OC, t.IV, pp.246-247) という段落は、「教育が重要だ」という主旨の一言で片づけられ (『児童教育論』2頁、『父母と子供』2頁)、その直後の、「我々は弱いものとして生まれる、我々には力が必要である (Nous naissons faibles, nous avons besoin de force)」とはじまり「生まれるときに持たなかったもので、大きくなってから必要なものは、すべて教育によって我々に与えられる (Tout ce que nous n'avons pas à notre naissance et dont nous avons besoin étant grands, nous est donné par l'éducation)」と終わる段落については、菅は初版ではほぼ底本のとおり訳していたが、新版では削除している。一度訳出していた部分を削除するからには、訳者がなんらかの判断をした可能性があるが、それをうかがい知るための決定的な資料は見つかっていない。なお、後段にすすむほど、改訳が認められる頻度が少なくなる。
- 12 『エミール』のフランス語原文については、現段階で国際的なルソー研究の標準的な典拠となっているブレイヤード版全集 (*Œuvres complètes de J.-J. Rousseau*, Paris, Gallimard, 5 vol., 1959-95) 第四巻に収められたテキストを用い、(OC, t.IV, p.380) のように、参照箇所を本文中に指示する。なお、ルソー生誕300年を記念して、現在、2件の新たな全集の編纂がすすめられている。J.-J. Rousseau, *Œuvres complètes et ses lettres*, Genève : Slatkin, Paris : Champion, 24 vol. prévus. J.-J. Rousseau, *Œuvres complètes, présentation chronologique*, Paris : Garnier, 22 vol. prévus.
- 13 『エミール』という書物を成り立たせているさまざまな仕掛けについて、緻密な分析を試みたつぎの研究を参照。Laurence Mall, *Emile ou les figures de la fiction*, Oxford, Voltaire Foundation, SVEC, 2002 : 04.

付録：訳出項目の対照表

tr. by Eleanor Worthington	菅緑蔭抄訳
<b>(BOOK FIRST)</b>	
GENERAL REMARKS. The Object of Education. 11	総論 1
The New-born Child. 15	新誕生児に就て 8
The Earliest Education. 24	第一期の教育 18
Maxims to Keep us True to Nature. 30	
Language. 35	幼児の言葉に就て 27
<b>(BOOK SECOND)</b>	
Avoid taking too many Precautions. 39	余計なる心配は無用なり 30
Childhood is to be Loved. 42	子供は愛すべきものなり 35
Neither Slaves nor Tyrants. 44	子供は奴隷に非ず又暴君に非ず 41
Reasoning should not begin too soon. 52	理論は余り早く教ゆべがらず 48
Well-Regulated Liberty. 54	
Proceed Slowly. 57	
The Idea of Property. 63	
Falsehood. The Force of Example. 68	虚言及び模範の効力に就て 51
Negative or Temporizing Education. 75	
Concerning the Memory. 77	
On the Study of Words. 80	
Physical Training. 91	体育に就て 63
Clothing. 93	衣服に就て 69
Sleep. 95	睡眠に就て 73
Exercise of the Senses. 96	五官の脩養 76
The Sense of Touch. 97	触官に就て 80
The Sense of Sight. 100	視官に就て 87
Drawing. 103	画学に就て 92
Geometry. 106	
Hearing. 108	聴官に就て 98
The Voice. 109	音声に就て 101
The Sense of Taste. 110	味官に就て 103
Result. The Pupil at the Age of Ten or Twelve. 113	
<b>(BOOK THIRD)</b>	
The Age of Study. 121	勉強の時代 109
The Incentive of Curiosity. 124	好奇心に就て 114
Things Rather than their Signs. 128	実物教育に就て 116
Imparting a Taste for Science. 130	学問と趣味 125
The Juggler. 133	
Experimental Physics. 138	実験物理学 128
Nothing to be Taken upon Authority.	実学に就て 136
Learning from the Pupil's own Necessities. 141	
Finding out the East. The Forest of Montmorency. 143	
Robinson Crusoe. 147	『ロビンソン、クルーソー』 141
Judging from Appearances. The Broken Stick. 149	
Result. The Pupil at the Age of Fifteen. 155	結果—十四五才頃の子供 146

履 歴

学 歴

- 1989年3月 早稲田大学第一文学部哲学科人文専修卒業  
1991年3月 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程前期課程（教育学専攻）修了  
1994年3月 同大学大学院同研究科博士課程後期課程（教育学専攻）単位取得退学

学 位

- 1997年6月 慶應義塾大学より「博士（教育学）」の学位を取得

職 歴

- 1990年4月－1992年3月 東京女子学院中・高等学校非常勤講師（フランス語）  
1992年4月－1994年3月 日本学術振興会特別研究員－DC  
1993年10月－1994年11月 創価大学通信教育部非常勤講師（西洋教育史）  
1994年4月－1997年3月 日本学術振興会特別研究員－PD  
1996年4月－1999年3月 帝京大学文学部教育学科非常勤講師（教育学概論，教育哲学，  
道徳教育）  
1999年4月－2001年3月 立教大学文学部教育学科専任講師（生活指導，道徳教育）  
1999年4月－2000年9月 日本女子大学人間社会学部教育学科非常勤講師（教育学概論，  
道徳教育）  
2001年4月－2008年3月 立教大学文学部教育学科助教授（2007年4月より「准教授」に  
職名変更）  
2003年4月－2004年3月 早稲田大学第一文学部総合人文学科教育学専修非常勤講師（教  
育哲学）  
2007年10月－2010年8月 上智大学総合人間科学部教育学科非常勤講師（道徳教育，教育  
学特殊講義）  
2008年4月－2013年3月 立教大学文学部教育学科教授  
2009年4月－2011年3月 慶應義塾大学文学部人文社会学科哲学系非常勤講師（哲学倫理  
学特殊講義）  
2010年3月－4月 パリ＝ディドロ大学東洋言語文明学部日本学科招聘教授（現代  
日本文化論）

## 所属学会

教育哲学会, 教育思想史学会, フランス教育学会, 日本18世紀学会

## 受賞

1989年3月 小野梓記念学術賞(卒業論文「ルソーの人間形成論」に対して)

1999年7月 第16回渋沢＝クローデル賞本賞(著書『ルソーの教育思想』に対して)

## 主要研究業績一覧

### 1. 著書(単著)

『ルソーの教育思想——利己的情念の問題をめぐって』風間書房, 1998年, iv + iv + 344頁。

### 2. 著書(共著)

[分担執筆]「啓蒙主義の教育思想(2) 進歩と教育」57～69頁, 原聡介ほか編『近代教育思想を読みなおす』新曜社, 1999年。

[分担執筆]「教育を問う」1～20頁, 橋本太郎ほか編著『新教育原論』酒井書店, 2001年。

[分担執筆]「教育の効用と副作用——教育言説の批判的吟味のために」115～130頁, 朱浩東ほか編『国際化社会の教育課題と人間形成』三一書房, 2004年。

[分担執筆]「『理性的人間』の形成と感覚論哲学」169～188頁, 田中克佳編『「教育」を問う教育学』慶應義塾大学出版会, 2006年。

[分担執筆]「涙ながらに読む書簡——ルソー『エミールとソフィ』をめぐって」89～118頁, 桑瀬章二郎編『書簡を読む』春風社, 2009年。

[分担執筆]「教育をめぐる問い——『エミール』を読む」117～143頁, 桑瀬章二郎編『ルソーを学ぶ人のために』世界思想社, 2010年。

[分担執筆]「近代フランスの教育思想」49～66頁, 新井保幸, 上野耕三郎編『教育の思想と歴史』協同出版(新教職教育講座シリーズ第1巻), 2012年。

### 3. 雑誌等掲載論文

「ルソーの人間形成論——自然人から有徳人へ」『人文論選』第3号, 早稲田大学文学部, 1991年3月, 1～37頁。

「ルソーにおける《amour-propre》——ルソー教育思想の構造理解のために」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第31号, 1991年3月, 151～158頁。

「ルソーの公民形成論の構造——利己的情念の排他性克服の論理とその意義」『フランス教育学会紀要』第4号, 1992年9月, 17～28頁。

「ルソーにおける「祖国愛」の対外的排他性——ルソーの公民形成論再考」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第37号, 1993年12月, 67～74頁。

「フランス啓蒙思想における利己的情念と社会秩序の創出——サン＝ランベール『普遍のカテキ

- ズム』の情念指導論をてがかりに」『フランス教育学会紀要』第6号, 1994年9月, 29~40頁。
- « Essai sur 《 l'amour-propre 》 chez Jean-Jacques Rousseau », *Etudes J.-J. Rousseau*, n° 7, Musée J.-J. Rousseau, Montmorency, oct. 1995, pp.223-239.
- 「ルソーにおける利己的情念と「人間の本源的善性」論」『教育哲学研究』第73号, 教育哲学会, 1996年5月, 51~64頁。
- 「『エミール』における実例的挿話」『帝京大学文学部紀要・教育学』第22号, 1997年1月, 265~287頁。
- 「教育言説の『普遍性』と歴史性」『近代教育フォーラム』第8号, 教育思想史学会, 1999年9月, 29~35頁。
- 「評判による情念の規制と社会秩序の創出」『立教大学教育学科研究年報』第43号, 2000年3月, 87~98頁。
- « Le soi dans le regard des autres : un essai sur le système philosophique de J.-J.Rousseau », in Serge Stinckwich (éd.), *Réflexivité et auto-référence dans les systèmes complexes*, acts des 12<sup>es</sup> Journées de Rochebrune du 24 au 28 janvier 2005, Ecole Nationale Supérieure des Télécommunications, Paris, janvier 2005, pp. 233-241.
- 「18世紀フランスにおける「聾啞者」へのまなごしの思想史的意味」『フランス教育学会紀要』第18号, 2006年9月, 5~18頁。
- « L'éducation est-elle un remède sans effets secondaires ? une critique des discours sur l'éducation au Japon », 『立教大学教育学科年報』第50号, 2007年3月, 37~46頁。
- 「テキストとコンテキスト——思想史研究の新たな可能性」『近代教育フォーラム』第16号, 教育思想史学会, 2007年9月, 121~128頁。
- « Délimiter la frontière entre animalité et humanité : le sens philosophique des discours sur la surdit  au si cle des Lumi res » 『立教大学教育学科年報』第51号, 2008年3月, 125-135頁。
- 「日本の近代化と『エミール』——三浦關造の抄訳を中心に」『思想』No.1027, 岩波書店, 2009年11月, 194~207頁。

#### 4. その他（抄録）

- 〔コレクション紹介〕「ルソー関連文献コレクション（法政大学文学部教育学科蔵）」『フランス教育学会紀要』第7号, 1995年9月, 98~105頁。
- 〔書評〕「Yves Vargas, *Introduction à l'Emile de Jean-Jacques Rousseau*, PUF, 1995」『フランス教育学会紀要』第8号, 1996年9月, 93~94頁。
- 〔発表要旨〕「自我は憎むべきか——17・18世紀フランスにおける「啓発された自己愛」と人間本性の復権」『日本18世紀学会年報』第12号, 1997年7月, 5~8頁。
- 〔コレクション紹介〕「フランス革命リサーチ・コレクション（早稲田大学中央図書館蔵）」『フランス教育学会紀要』第9号, 1997年9月, 111~116頁（小林亜子氏と共著）。
- 〔翻訳〕サン＝ランベール「あらゆる国民の習俗の諸原理, または普遍のカテキズム（抄）」『帝京大学文学部紀要・教育学』第23号, 1998年1月, 115~139頁。

- [書評]「安川哲夫『ジェントルマンと近代教育』勁草書房, 1995年」『日本18世紀学会年報』第13号, 1998年7月, 28~29頁。
- [図書紹介]「“*Emile et l'éducation*” (*Etudes J.-J. Rousseau*, n° 1997)」『フランス教育学会紀要』第10号, 1998年9月, 99~104頁。
- [コラム]「バココ教徒の改心」『三田評論』No.1019, 慶應義塾, 1999年12月, 19頁。
- [コラム]「『仮面』に隠された不安」『青淵』第610号, 渋沢青淵記念財団竜門社, 2000年1月, 43~45頁。
- [項目執筆]「アラン」「自由」「ブルデュー」「モンテーニュ」「良心」「ルソー」, 教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房, 2000年5月, 788頁。
- [書評]「Natalie-Barbara Robisco, *Jean-Jacques Rousseau et la Révolution française : une esthétique de la politique, 1792-1799*, H. Champion, 1998, 464 pp.」『日本18世紀学会年報』第15号, 2000年7月, 32~33頁。
- [書評]「ハーラン・レイン編『聾の経験——18世紀における手話の「発見」』(石村多門訳, 東京電気大学出版局, 2000年)」『フランス教育学会紀要』第13号, 2001年9月, 129~132頁。
- [コラム]「ルソー「経験は授業に先立つ」」『総合学習』12, 黎明書房, 2002年3月, 8頁。
- [書評]「Christine Quarfood, Condillac, *la statue et l'enfant: philosophie et pédagogie au siècle des Lumières*, traduit du suédois par Yvette Johansson, L'Harmattan, 2002, 381pp.」『フランス教育学会紀要』第16号, 2004年9月, 113~124頁。
- [海外文献案内]「『ベスタロッチ年報』の創刊」『近代教育フォーラム』第13号, 教育思想史学会, 2004年9月, 317~319頁。
- [書評]「*Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau*, n° 45 : *Jean-Jacques Rousseau et les arts visuels*, Actes du Colloque de Neuchâtel (20-22 septembre 2001), édités par Frédéric S. Eigeldinger, Droz, 2003, 677pp.」『日本18世紀学会年報』第20号, 2005年6月, 88~89頁。
- [書評]「白水浩信著『ボリスとしての教育——教育的統治のアルケオロジー』(東京大学出版会, 2004年)」『フランス教育学会紀要』第17号, 2005年9月, 89~94頁。
- [研究案内]「ルソー研究入門」『フランス教育学会紀要』第19号, 2007年9月, 135~142頁。
- [コラム]「ルソーと思考実験としての『エミール』」フランス教育学会編『フランス教育の伝統と革新』大学教育出版, 2009年, 48頁。
- [座談会]吉岡知哉, 坂倉裕治, 桑瀬章二郎, 王寺賢太「ルソーの不在、ルソーの可能性」『思想』No.1027, 岩波書店, 2009年11月, 8~44頁。
- [コラム]「〈教育哲学を考える〉境界への挑戦」『教育哲学研究』第102号, 教育哲学会, 2010年11月, 133~134頁。
- [図書紹介]「Claude Habib (dir.), *Éduquer selon la nature : 16 études sur Émile de Rousseau* (Desjonquères, 2012)」『フランス教育学会紀要』第24号, 2012年9月, 155~158頁。
- [コラム]「*Discours sur la surdit  par les philosophes des Lumières* », *Journal de Saint Jacques*, n° 40 (numéro sp cial : «Le tricentenaire de la naissance de l'Abb  de l'Ep e »), Institut National des Jeunes Sourds de Paris, novembre 2012, pp.6-7.